

文化の力で大阪に活力を。

OSAKA*文化力

No.113

2011 AUTUMN・秋

関西から

文化力

POWER OF CULTURE

リレーインタビュー
フリリップ ジャンヴィエ・カミヤマ氏

在京都フランス総領事・関西日仏学館館長

Front Talk

上田篤氏×堀井良殷 大阪21世紀協会理事長

市場経済から文化経済へ「小国大輝」で日本が変わる

メセナ最前線

株式会社大林組 会長 大林剛郎氏

大阪文化考

当間修二氏主宰 大阪コレgium・ムジウム

南大阪・上町台地フォーラム報告

四天王寺「聖霊会」、住吉大社「御田植神事」他

リレーインタビュー 「私のsweet水都」

フィリップ ジャンヴィエ・カミヤマ氏

在京都フランス総領事・関西日仏学館館長

京都市左京区に、在日フランス大使館(東京)の管轄下の文化機関「関西日仏学館」がある。2009年12月、フランス総領事館は大阪からこの関西日仏学館内に移転し、日仏間の政治的・文化的業務を担うこととなった。日本料理とりわけ正月の雑煮が大好きという総領事に、移転の理由や大阪・関西の文化による活性化策などについて伺った。

隣の部屋に行く感覚

総領事館を京都に移転したのは、関西日仏学館と関西日仏交流会館ヴィラ九条山(山科区)を文化業務の拠点としてさらに活用するためです。とくに関西日仏学館は設立して80年以上の歴史があり、日本におけるフランス語やフランス文化の普及、日仏のアーティストの交流促進などを中心に長く活動しています。

一方、経済的な業務は、大阪市北区堂島浜にある大使館企業振興部(大阪事務所)に残っています。けっして大阪を見捨てて京都にきたわけではありません。セミナーや文化施設の訪問のため大阪に行く機会は多いですね。当館近くの京阪出町柳駅から45分ほどで大阪の中心部に着きますから、遠くの町へ移動するというより、ドアをあけて隣の部屋に行くような感覚です。

在京都フランス総領事館は愛知県から沖縄県まで西日本全域を管轄しています。また関西日仏学館は、その名の通り「関西」を活動範囲としていますから、京都も大阪も関西のなかの郊外のひとつだという認識です。

「水の都」のポテンシャル

2009年9月に大阪ビジネスパーク(中央区城見)の在大阪・神戸フランス総領事館に赴任した私は、着任してすぐ、大阪府知事や大阪市長の招待で、関西領事団の方々と一緒に大阪湾や中之島一帯を船でクルージングする機会を得ました。だから私にとって大阪の第一印象は「水の都」で、その独自の景観と文化的重要性をよく理解しました。

パリでは、バトー・ムーシュ(Bateaux Mouches)というセーヌ川沿いの街並みを楽しむ遊覧船が有名です。パリの夜景を見ながら船上でディナーも楽しめるとあって、観光客にはとても好評です。私はこうしたことを大阪の川で行えば、外国人観光客にとっても喜ばれると思います。また、19世紀の舟運時代のように伏見と大阪の間に遊覧船を就航し、水辺から京都と大阪の観光を楽しむツアーがあってもいいでしょう。大阪のまちと川の観光的なポテンシャルはとても高いと思います。

フランスと関西の文化交流

日本では、「熱狂の日」と呼ばれるクラシック音楽のイベントが毎年各地で行われますが、これはフランス・ナントの「ラ・フォル・ジュルネ(La Folle Journée)」が発祥です。多くの人にクラシック音楽に触れてもらうのが目的で、街角の広場やお店などが演奏会場になります。これが大都市ではなく中核都市で行われていることや、行政が主導して成功させていることは、非常に興味深いですね。大阪にも御堂筋のような大

通りや川べり、港などの空間が多くあるのですから、これらをもっと活用することで文化的な盛り上がり期待できると思います。

フランスと関西の音楽交流といえば、例えば関西フィルハーモニー管弦楽団の総指揮をオーギュスタン・デュメイ(Augustin Dumay)氏が務めておられます。しかし文化交流全体としては、まだまだ足りません。東京がほとんどの文化を磁石のように引き寄せているからなのですが、私はそれを関西に引き戻したい。そのためにも総領事としていろいろなプロジェクトを進めていきたいと思っています。



関西日仏学館にて

フィリップ ジャンヴィエ・カミヤマ氏(Philippe JANVIER-KAMIYAMA) 1954年フランス・ヴァランセ(アンドル県)出身。1978年フランス外務省入省。ソビエト連邦、トルコ、フィンランド、セネガル、日本(東京)のフランス大使館で書記官を務め、2009年9月在大阪・神戸フランス総領事に就任。同年12月1日より現職。国家功労賞シュヴァリエ、フィンランド白薔薇勲章騎士賞受章。

関西日仏学館:1927年設立。建物は1936年に建築され、国の登録有形文化財に指定(2003年改築)。



市場経済から文化経済へ 「小国大輝」で日本が変わる

地域は疲弊し文化の切り捨てが進む。日本を覆う閉塞感の原因はどこにあるのか。そして地域はいかにして活力を取り戻し、輝く文化力を発揮できるのか。

上田氏は、西郷隆盛が理想とした「小国大輝」の国づくりにこそ、そうした問題を解く鍵があるという。

「鹿児島王国を建設した」とまで言われる

西郷の地域尊重主義は、はたして日本をどう変えるのか。

それは意外にも、スイスの国づくりと深い関係があった。

ゲスト

上田篤氏

元京都大学・大阪大学教授
西郷義塾主宰

聞き手

堀井良殷

大阪21世紀協会理事長

震災で分かった文化性

堀井 日本は今、行き過ぎた中央集権や効率優先主義によって、歴史・文化の軽視や地方の疲弊といった問題が顕在化しています。上田先生は2009年に『西郷隆盛 ラストサムライ(日本経済新聞出版社)』を上梓され、現在は『西郷義塾』を主宰されるなど、西郷隆盛の思想をもって現代日本の国づくりを根本から問い直そうとされているように思います。本日はそうした観点から、現代日本が抱える文化性の欠如や地域社会の自立といった問題について、上田先生のお考えをたっぷり伺いたいと思います。

上田 私もお話したいことがたくさんあります(笑)。まず、文化性の欠如については、阪神淡路大震災が起きたときから感じておりました、この度の東日本大震災でその思いをさらに強くしています。ここでいう文化性とは多様性のことです。東日本大震災では、地震によって電力供給が断たれ、鉄道輸送が完全にストップしました。すべて電化されているからです。とはいえディーゼル機関車を使うことができれば、鉄道輸送は少しでも確保できたはず。アメリカではテロや災害で架線の電力供給が断たれたときに備えて、全列車の2割程度はいまだにディーゼル機関車にしています。また、陸路が崩壊したのであれば、海から救援隊や自動車などを投入すればいいのですが、海上自衛隊の揚陸艇は災害地にはなかなか行けません。揚陸艇というのは、敵の攻撃をかいくぐって侵攻し、敵陣の岸辺に直接乗り上げて兵士や装甲戦闘車などを上陸させる、いわば海の戦車です。日本の揚陸艇はフェリー(貨客船)のように波が静かで港がないと接舷できないものだったので、地震で壊滅状態にある港には入れませんでした。

(編集部補:東日本大震災では、「オペレーション・トモダチ(米軍による東日本大震災のための救援・救助作

戦)」で、震災の翌月、宮城県気仙沼市の離島・大島に米軍の強襲揚陸艦エセックスの汎用揚陸艇が上陸し、海兵隊員ら約300数十人が搬入した重機などを使ってがれき撤去を行った)

また、日本のコンテナ船には荷揚げ用のクレーンを装備していません。クレーンは港側にあるんです。一方、アメリカにはクレーンのない港でも物資を運べるように、クレーンを装備したコンテナ船があります。こうした備えは経済的、効率的に考えれば無駄といえますが、有事になると生きてくる。一見不経済で非効率であっても、こうした多様性を備えておくことが文化だと思えます。電力も原発だけに頼るのではなく、いろいろな手だてを備えておくべきです。

堀井 いつ頃からこうした効率性・経済性が偏重されるようになったのでしょうか。

上田 震災対策に限らず、近年の日本の政治、経済、社会全般における混迷的状况は、明治維新にさかのぼって問題があると考えています。大久保利通をはじめ明治維新を進める者たちは、「西洋の技術を取り入れ、日本人の魂をもって近代革命を起そう」という和魂洋才思想に基づいて改革を進めました。その結果、日本の産業や経済はかなり西洋化しました。ちょんまげを結ったり刀を差す人がいなくなり、生活習慣もかなり洋風化しましたね。しかしここで問題となるのが、洋才を重視するあまり「和魂」を切り捨ててしまったことです。

魂を取り戻す

上田 西洋化によって日本人が自らの魂をなくしていることは、私の専門である建築や都市にも如実に表れていま

す。例えば、日本人がヨーロッパ旅行をすると、必ずといっていいほど古い教会や町並みを観光します。歴史遺産が豊富にあるからですね。一方、日本では、ヨーロッパのような古い町並みは京都や奈良を除いてほとんどなくなってしまいました。そういうことを言うと、「日本と西洋では都市構造が違う。西洋は石造建築だから残っているが、日本は木造建築だから戦争で焼けて残っていないのは当然だ」と反論されそうですが、ヨーロッパでも第二次世界大戦で多くの歴史的建築が失われました。しかし、それらの多くが戦後に復元されているんです。その典型的な例が、ドイツ・ザクセン州の州都ドレスデンにあります。第二次世界大戦でイギリス軍は、この町の中心にあるバロック建築のカテドラル(聖母教会)を空爆し、16~18世紀の町並もろとも一瞬にして吹き飛ばしました。カテドラルは内部が吹き抜けですから、ここに高性能爆弾を打ち込んで屋根に穴を開け、さらに焼夷弾を投入して大爆発させるといった新手法の作戦です。もちろん多くの市民も命を落としました。ドレスデンに住むザクセン人は、イギリス人(アングロサクソン人)から見れば民族的には同胞です。ドイツ軍は、そんなまちをイギリス軍が攻撃するとはよもや考えておらず、チャーチルが下した容赦ない奇襲に驚愕しました。

さて問題は、この爆撃を受けた後の対応でした。ドレスデンの人たちは爆撃された場所をフェンスで囲み、そこに粉々に飛び散った建物の破片を放り込み、瓦礫のまま60年間放置しておいたんです。いつか必ずカテドラルや町並みを復元しようという考えからですが、その歴史的な破片を誰も盗んだり持ち出そうとしなかったことには感心させられます。そうして60年経ち、10万個以上の破片をコンピュータで計測して再び組み立て、カテドラルや町並みを復元したんです。復元された建物は見ればすぐ分かります。当時の破片は黒ずんだ色をしており、それが見つからなかったところは現代の白い石で埋め合わせていますから、黒と白のまだら模様になっているんです。日本人はこの建物をぜひ見るべきだと思いますね。なぜなら復元された聖母教会は、ドイツ人の魂の象徴だからです。これを見れば、「日本は木造建築だから焼けてなくなれば復元できない」なんて、復元する気がないための言い訳のように聞こえます。

堀井 いったい「和魂」はどこに行ってしまったのでしょうか。

上田 建築や都市についていえば、日本人の魂の象徴は「木のまち」だと思います。私たちの長い歴史を振り返れば、連続と続く木へのこだわりが感じられます。例えば日本は中国から漢字をは

びに建物や持ち物などを焼却し、最初から作り直す文化がありました。江戸のまちが大火で焼失しても、またすぐに建て直している。そうして外観は多少変わりつつも、木造の文化は連続と続いているんです。日本人がここまで木造にこだわるのは、単に耐震性や機能性のためではなく、そこに日本人の魂が込められているからだだと思います。これには安藤忠雄さんも共感してくれて、彼と一緒に木の文化について研究したこともあります。彼はセビリア万博の日本館を木造で設計して話題になりましたね。また、こうした木の文化は、かつて大阪商人の信用経済の象徴であった「のれん、蔵、船」にも反映されていますし、そうした商業文化を支えていたのが町家でした。つまり大阪人にとっては、町家こそが自分たちの魂の拠り所だったんです。しかし明治維新以降、大久保利通らが西洋文化の導入に躍起になるあまり、日本人古来の魂はどんどん追いやられてしまいました。

西郷隆盛とスイス

上田 大久保利通はプロイセン(ドイツ)やフランスで学んだ富国強兵策を掲げ、新たな国づくりをめざしました。もともと富国強兵という言葉は、熊本出身の勤皇の志士である横井小南(1809~1869)が言い出したもので、横井は富国強兵に加えて「土魂」つまり武士の魂の大切さを説いています。しかし大久保利通や山縣有朋らが目指したのは、土魂なき富国強兵でした。陸軍大将だった山縣有朋は、「武器さえあれば農民でも兵士になれるのだから土魂など必要ない」と考え、徴兵を行っています。江戸城の無血開城に端を発した上野戦争(1868年:旧幕府軍の彰義隊と薩摩・長州藩を中心とする新政府軍の交戦)では、大村益次郎が作戦指揮する新政府軍が、肥前佐賀藩から調達した多数のアームストロング砲を使って上野山の彰義隊をわずか1日半で陥落させました。まさに武器の勝利です。このとき西郷隆盛は、「仕えた殿こそ違え、彰義隊とて我らと同じ武士。それを殺すとはまかりならぬ」と主張したために総大将を解任されたと言われていま

す。西郷にとって「武士より武器」という魂なき効率優先主義は、断じて受け入れ難いものだったのでしょうか。

堀井 すべては岩倉具視使節団で欧米スタイルを学んだ大久保利通や木戸孝允らが効率最優先の富国強兵路線に走り、強力な中央集権国家をつくらうと





したことに起因しているんですね。一方、使節団に加わらず日本で留守中の政府を主導した西郷隆盛は、帰国した大久保や木戸と意見が合わず郷里に帰って独自の国づくりに取り組みました。上田 西郷隆盛は遣韓使問題で下野した後、薩摩に帰って私学校をつくり、大久保利通らが進める中央集権体制とはまったく逆の、地域の自立による国づくりをめざしました。大久保らが農民に武器を持たせて「これからは武士ではなく武器の時代だ」と徴兵軍をつかったことに対し、西郷は兵法に加えて儒教思想である陽明学を教え、魂の大切さを訴えたんです。西郷は、東洋の国々を植民地化するような西洋の道德観は信用ならないと思っていたんでしょうね。そして重要なことは、私学校で農業も教えたことです。西郷は自ら率先して畑を耕し、作物を売りに行って、「これからは文・武・農の時代だ」と範を示しました。江戸時代には、坂本龍馬のように地元に着定して農業も行い、武士としての教育も受けた「郷土」がたくさんいました。郷土は強い団結力を持っており、他所から藩主に着任した者にとっては恐い存在です。例えば土佐の郷土である長宗我部一族は、新しく土佐藩主に着任した山内一豊に仕官を促されても大抵断っていますし、徳島藩主の蜂須賀家政は、長宗我部の残党と融和するために阿波踊りをはじめたとも言われています。このように西郷は、城郭を築くのではなく、私学校を中心に多くの「郷土」をおくことで国を守ろうと考えました。それは「小さな国家」ともいべきもので、地域が自立した新しい国づくりのモデルでした。そしてそれこそが、スイスのような国家だったのです。

西郷自身はスイスのことは何も語ってはいませんが、じつはスイスと深い縁がありました。明治維新の前、西郷は横浜にいたファーブル・ブランドとい

うスイスの貿易商と懇意にしており、ブランドの射撃クラブで銃術を学んでいます。薩英戦争(1863年)以後、薩摩とイギリスは友好関係を深めていましたが、戊辰戦争(1868年)で使われた武器はイギリスから輸入せず、ブランドを通じてスイスから調達したものでした。西郷は、アヘン戦争(1840年)で中国を植民地化したイギリスに対して、友好的に見えて何をするかわからない恐れを感じていたのでしょう。スイスはヨーロッパのなかで唯一植民地を持たなかった国ですから、取引相手としては安心できたんですね。そして、その武器を横浜から鳥羽伏見に運んだのが西郷の従兄弟の大山巖です。大山はのちに、ヨーロッパの砲兵術を学ぶためブランドの世話で3年間スイスに留学しました。西郷隆盛に兄事した村田新八もスイスを訪れています。また、西南戦争(1877年)で薩摩軍の一員として従軍し負傷した西郷の長男菊次郎を横浜で世話したのもブランドでした。西郷菊次郎は、後年京都市長にもなった人です。こうしたことから西郷隆盛は、ブランドを通してスイスに精通していたように思われます。また、スイスについては明治初期から福沢諭吉をはじめ為政者たちに良く知られており、木戸孝允でさえ「スイスはヨーロッパで一番良い国だ」といっている記録も残っています。

はん ゆう 絆友と 地域の自立

堀井 日本人がもう一度明治維新の原点に立ち返って国の再建を考えるならば、西郷隆盛が目指したような、自立した地域社会というもう1つのモデルがあるわけですね。それがスイスであると。

上田 スイスは小国ですから、他国から攻められやすいという考えは誤りです。岩山ばかりのスイスを侵略してもメリットは少ない。ただ有事の備えは

必要です。そのことは徳川幕府でさえ分かっていました。侵略者にとって日本は、占領するには国土は狭いし、資源も乏しい。しかも国内いたるところに武器を持ったサムライがうようよしている。こんな国はスイスと同じで、侵略するメリットがないんです。攻め込むなら国土や資源が豊富な中国のほうがずっと価値があるでしょう。ただしロシアに対してだけは、南下政策の足がかりとして北海道をはじめ日本の港が標的にされることを懸念して、明治政府は屯田兵を配備するなど対ロシア政策を講じました。西郷隆盛は私学校で教えた兵法も内戦のためではなく、ロシアを仮想敵国とした自衛策だったんです。

現在、スイスの人口は600万人ほどですが、そのうち40万人が民兵です。常備軍は2,000人ぐらしかおらず、そのほとんどが空軍関係者です。陸軍に相当する民兵は18歳から55歳くらいまでの民間人ですが、彼らは日頃訓練を受けて有事に備えており、武器などの装備も自宅に常備しています。有事の際にはそれを持って市町村長のもとに参集することになっており、市長や町長の指揮下で国防活動に従事することになっています。スイスには約3,000の市町村があり、40万人の民兵をわずか2日間で動員できるといわれています。また、民兵以外に女性や高齢者などによる30万人の民間防衛員がいます。この人たちは戦闘員ではありませんから武器は持っておらず、消防や警察の補助をしたり、災害時の手伝いを行います。もちろんこの人たちもボランティアで、有事の際には何をにおいても市町村長のもとに駆け付けることになっています。日本で災害などがあると、ボランティアや募金活動をする人としていない人がいますね。私はそのボランティア活動をスイスの民間防衛員のように制度化すればいいと思っています。そうして自然災害やテロなどが起きた際には、全員がその痛みを分かち合い、助け合うのです。こういう人たちのことをスイスのように「民間防衛員」というと

徴兵制をイメージして反対する人がいるでしょうから、私はこれを「絆友(はんゆう)」と名付け、地域の絆で結ばれた人たちが治安や防災に従事する制度を作ればいいと主張しています。なかには絆友にはなりたくないという人もいますが、そういう人には「非絆友税」を納めてもらって協力してもらえばいいでしょう。堀井 絆友がすべて市町村長の指揮下に入るのであれば、よほどしっかりした人を首長に選ばなければなりませんね。上田 おっしゃる通り、そこが重要なところですよ。自分たちの生命を預ける人ですから、市町村長は市町村の直接選挙で決める。頼りない人や横暴な市町村長を選ぶわけにはいきません。そうした意識を持つことで地域の人々の結束も強まるはずですよ。地域社会の自立は、自衛によって生まれると思います。絆友意識をもって有事に備え、自衛、自立の気運が醸成されれば、地域社会は必ずよくなっていくと思います。堀井 阪神淡路大震災のとき、市民に「自助(自分で自分を助ける)、共助(お互いに助け合う)、公助(行政機関などに助けてもらう)のうち、どれが一番助かったか」というアンケートをとった

ら、「自助」と答えた人が圧倒的に多かったそうです。いざというとき、自分の身を守るのは自分でしかないということですね。日本人は明治維新以来150年を経て、今やすべてお上がしてくれるものだと思っているふしがあります。何でもかんでもお上に要求することが良いことだとされ、ついには陳情できる議員が良い議員だと思われるようになってしまった。そういう中央だけの民主主義は方向性が違うと思います。上田 かつて日本は、自治体警察(1947~1955)といって市町村単位で警察を持っていました。しかし、そうした警察は地元の古参議員と癒着したり、言いなりになる傾向がありました。親子代々にわたって議員をしていると、市町村長や警察より地域の事情に詳しくなり、意見も通りやすくなりますからね。そんな古参議員が威張っている地域行政は不健全というべきです。堀井 陳情を売り物にしたり、既得権と癒着したり、さらには議員の地盤も相続みたいに受け継がれる例も多い。上田 そうです。スイスでは議員はすべてボランティアです。日本もそうすればいい。総理大臣を含め議員にとって肝心なのは有事の行政をしっかりとすることであって、平時の行政の大半は

役人の仕事ですから、それを知ってもらう意味において議員活動をボランティアで行えばいいと思います。日本は明治時代まではスイスと同じ「郷土国家」でした。だからこそ西郷隆盛はその伝統にもとづいて農業を国防産業と位置付け、文武農を奨励しました。翻って現代においても、市町村が地域産業を育成・援助することで自立していかなくてはならないと思います。そして大事な政策は住民投票で決定する。そんな「半直接民主制」が市町村の自立・自衛を支えることになると思います。

動的平衡社会の 強み

上田 明治維新の富国強兵策によって士魂が切り捨てられ、中央集権体制が一層強く推進されたことは、現代の霞ヶ関官僚による実質的な支配を生み、地方の弱体化や政治・経済・社会の閉塞感を生む原因となっています。私は大学を卒業して建設省に入り、霞ヶ関で10年間仕事をしました。その経験からいえば、日本の政治を事実上動かしているのは、霞ヶ関に勤める課長以上の





堀井良殿

官僚です。政治家が法案を出せば、それを通すために根回しをするのが官僚の仕事なんですね。例えば原子力発電所をつくる当初、万一事故が起きたときのリスクが大きいという理由で電力会社各社は反対しました。そこで原子力災害対策特別措置法などをつくって国の補償体制をつくるのですが、そうした法案を通しやすくするのは官僚です。審議会を組織する際にも、審議会で決められる内容や方向性に沿った考えをもつ大学教授などは官僚が人選します。こうしたことは6,000人の課長補佐と2,000人の課長級以上の官僚が鉛筆を舐め舐め、また根回ししながら決めていることで、私が官僚だった時代からこのやり方は変わっていないでしょう。いくら政治主導を唱えても、この体制を変えることは並大抵のことではありません。第二次世界大戦後、マッカーサーは軍閥や財閥を解体しましたが、官閥だけは温存した。占領政策を進めるためには、そのほうが好都合だったんですね。官僚からは戦犯も出ていません。だから今でも日本を実質的に動かしているのは、政治家ではなく霞ヶ関官僚だと言っても過言ではありません。堀井 このままでは絶望的ですね。官僚も生かし、民間も生きる道はないのでしょうか。

上田 だからその突破口になるのが“絆友”なんです。本来、日本は分散型の社会だったのですが、明治維新によって中央集権体制に変えられてしまいました。ですから日本を再び分散統治型の社会に戻そうということです。1853年にペリーが黒船を率いてやってきて、その15年後の1868年に江戸幕府が倒れました。当時、そんな大きな政変を予

想したサムライはどれだけいたでしょうか。「尊王攘夷」という言葉が出た当初は、誰も見向きもしませんでした。いったんそれが理解されると、燎原の火のように広まりました。日本は情報伝達が発達していますから、変わる時は恐ろしいまでに変わるんです。堀井 上田先生が提唱される絆友社会のように、自らのことは自らで行うという意識を持ちつつ、それでも足りないものは連帯して国レベルで考えるという、しくみにしていくべきでしょうね。国民はこれまで、“民をして由(よ)らしむべし、知らしむべからず(為政者は人民を施政に従わせればよい)であり、その道理を人民にわからせる必要はない／論語「泰伯」”ということに慣らされてしまったように思います。昨今はマスコミも付和雷同した論調が幅を利かせ、政治がパフォーマンスになってしまっている。ワンフレーズポリティックスがもてはやされ、政治の劇場化現象が起っている。そうした結果、文化軽視、地方の疲弊、社会の混迷と閉塞感を生んでいる。こういう日本の状況を変えるためにも、明治維新の問題の原点に立ち返って考えるべきでしょうね。

上田 西郷隆盛をはじめ大久保利通や木戸孝允は明治維新三傑と言われていますが、伊藤博文や板垣退助、岩倉具視のように紙幣の肖像にはなっていません。いまだ彼らの評価が定まっていなからです。日本の政治家や官僚、学者たちは、いまだに明治維新の総括をしていない、あるいはできていないんです。とくに逆賊とされた西郷となるとどう評価していいかわからないんです。堀井 ともあれ、私はスイスにも行って

ろいろ調べた結果、西郷がめざした自立した地域社会の集まりによってこそ、“小国大輝”の日本が実現するという思いを強くしています。日本は経済大国になりましたが、国土や資源は乏しい。しかし、そんな小さな国でも文化によって大きく輝くことができるんです。そしてその文化とは、“動的平衡社会”によって育まれるものだと考えています。動的平衡とは生物学用語で、生物を構成している細胞や組織は新旧の分子が入れ替わりつつバランスを保つことをいいます。つまり人間の身体の細胞の中身は3か月ですべて入れ替わりますが、外見は変化せず保たれているというものです。私は、社会も動的平衡によって安定し持続するのがよいと思います。1万年以上続いた縄文時代は、社会が独立した集落(細胞)の集合体、つまり分散自立型社会だからでした。いくつもの集落が災害や疫病などで全滅しても、すぐ新しい集落ができて縄文社会全体としては変わらず存在し続けました。翻って現代の日本は中央集権社会ですから、東京が全滅したらもう終わりでしょう。しかも、そんな社会において「経済性・効率性」という市場原理で文化を削っていけば、いずれ文化はなくなってしまし、国や地域を弱体化させてしまいます。採算や効率を最重視する市場経済ではなく、行動の多様性を重視した“文化経済”によってこそ、国家や地域の持続性が保たれるのです。

堀井 市場経済ではなく文化経済によってこそ国や地域が保たれるというお考えは、とても説得力がありますね。本日はどうもありがとうございました。(2011年8月2日/大阪21世紀協会にて)

上田 篤氏

昭和5年(1930)大阪市出身。京都大学工学部建築学科および同大学院卒業後、建設省入省。京都大学、大阪大学、京都精華大学各教授を経て、現在、NPO法人社叢学会副理事長、西郷義塾塾長。日本建築学会特別賞、日本エッセイストクラブ賞、環境優良賞、毎日出版文化賞など受賞。近著『庭と日本人(2008年・新潮社)』『西郷隆盛ラストサムライ(2009年・日本経済出版社)』『週刊伝説と国づくり(2011年・鹿島出版会)』など。主な建築作品『大阪万国博覧会お祭り広場(1970年・日本万国博覧会協会)』『洛西ニュータウン(1982年・京都市)』『京都精華大学キャンパス(1997年・京都精華大学)』など。



伝統神事・祭礼を間近で見学
「南大阪・上町台地フォーラム」報告

大阪・関西の伝統行事や伝統芸能などを支援する大阪21世紀協会では、平成23年度より南大阪地区の歴史文化の探究・活性化をテーマに、「南大阪・上町台地フォーラム」を開催しています。今年度は会員ならびに一般の方を対象に、上町台地にある神社・仏閣の神事や祭礼の見学会、講演会を開催するとともに、これら伝統行事を記録・発信しています。今年度のフォーラム対象行事をご紹介します。

しょうりょうえ
聖霊会(4月22日)

四天王寺(大阪市天王寺区)は、推古天皇の甥にあたる聖徳太子が崇仏派の蘇我馬子と共に挙兵した折、廃仏派の物部守屋への戦勝を祈念して593年に建立された。聖霊会は聖徳太子の命日(旧暦2月22日)に行われる当寺のもっとも重要な

つ大規模な法要で、現在は毎年4月22日に行われている。

伽藍の北にある六時堂に仏舎利と聖徳太子の御霊を迎えて催行され、法要の間は、堂前の石舞台で天王寺楽所による雅楽や舞楽(重要無形文化財)が途切れることなく奉納される。平安時代には都の貴族の四天王寺詣の楽しみのひとつだったともいわれ、今なおその優雅な調べと舞は多くの参詣者を魅了している。今年は雨天のため、舞楽は六時堂内で行われた。

大阪21世紀協会では、当法要を「南大阪・上町台地フォーラム」の第1回として、賛助会員の皆様に六時堂縁側の特別席で参観いただいた。さらに5月14日には、同寺本坊にて四天王寺大学教授の南谷美保氏と同寺執事の南谷惠敬氏による講演会を開催し好評を得た。



聖霊会に欠かせない舞の「蘇利古(そりこ)」。この曲の間に太子御影の帳が上げられる。



六時堂前の「石舞台」。天候が良ければこの上で舞楽が行われる。

いくくにたま
生國魂神社
大阪三大夏祭りのひとつ
「陸のいくたま」



生國魂神社(拝殿)と本殿(拝殿の奥)

いくたま夏祭り(7月11・12日)

生國魂神社(大阪市天王寺区)はもともと大阪城の近くであり、豊臣秀吉が築城する際に現在の地に移転された。毎年7月11、12日の生國魂神社夏祭りでは、同社から大阪城に向けて御鳳輦(神霊の乗物)の陸渡御が行われている。いわば「里帰り」だ。最盛期の明治から昭和初期には千人を超える人々が繰り出し、「陸のいくたま」「川の天神」と称されるほど賑わった。現在は交通事情を踏まえ、御鳳輦を車で運んでいる。この日は子供神輿や獅子舞、枕太鼓なども繰り出し、子どもから大人まで大勢の人で溢れんばかりとなる。

同社のご祭神は国土の守護神である生島大神と足神大神、生活全般の守護神・大物主大神(ダイコクさん)など。その昔、上方落語の祖・米澤彦八が境内で上方落語をひろめたことから芸事の神様とも言われている。

いくね
生根神社
大阪に唯一残る
「だいがく」を公開



生根神社本殿と「だいがく」

だいがく祭り(7月24・25日)

「だいがく」とは「台楽」または「台額」と書き、雨乞いの神事に使用される櫓のこと。清和天皇の時代、難波の地一帯を早魃が襲った際、日本60余州の一の宮の御神燈と鈴を付けた櫓を立てて雨乞い祈願をしたところ、大雨が降り注いだことから始まった。

生根神社(大阪市西成区)のだいがくは高さ20mの柱に約70個の提灯を飾り付けたもので、かつては各所にあったが戦災などで消失し、現在は同社に保存されている1基のみとなっている。昭和47年に大阪府の有形文化財に指定され、これが公開されるのは、生根神社夏祭りの7月24日(宵宮)と25日(本祭)の2日間のみ。「だいがく音頭」や「だいがく担ぎ」なども奉納され、その古式ゆかしく壮観な祭りを楽しもうと多くの人たちで賑わう。

藤間音花さんによる神田代舞(写真提供:住吉大社)



源氏物語にも登場する
水都大阪の守護神大法要
住吉大社

54年ぶりに架け替えられた反橋(通称太鼓橋)



住吉大社御鎮座1800年記念大祭(第一本宮)

御鎮座1800年記念大祭と奉祝行事(5月12日~24日)

今年、御鎮座1800年を迎える住吉大社(大阪市住吉区)で、その記念大祭(5月12日)と、神楽や日本舞踊などの奉祝行事(~24日)が行われた。同社では、伊勢神宮と同じように20年ごとに社殿を修造して神霊を移す「式年遷宮」も行っており、平成21年12月に49回目の遷宮を終えている。住吉大社御鎮座1800年記念大祭は、20年後に控える第50回式年遷宮に向けた第一歩ともなった。

記念大祭では、住吉大社奉賛会長の佐藤茂雄氏(大阪商工会議所会頭)や歌舞伎俳優の市川團十郎氏をはじめ多数の関係者が第一本宮(国宝)に参列し、祝詞奏上や天皇陛下からの幣帛(へいはく)を真弓常忠司宮自ら住吉大神に献上。式後、真弓宮司は、「当地から遣随使や遣唐使が出航し、源氏物語にも登場したり、近世には井原西鶴や松尾芭蕉も訪れた。反橋は大阪八百八橋の祖景ともいべき存在で、住吉大社は水都大阪の守護神。御鎮座1800年は、大阪発祥の1800年でもあり慶賀すべきこと」と挨拶した。

その後、一般の参詣者が見守るなか、第一本宮や吉祥殿にて花柳流日本舞踊や清元流浄瑠璃・三味線、住吉能、神楽などが連日奉納され、19日には茶道裏千家の千玄室大宗匠による献茶式も行われた。なかでも15日には神田代舞(みとしろまい)や田植踊、住吉踊などの多彩な神賑行事が終日繰り広げられ、多くの参詣者が当地ならではの伝統芸能を楽しんだ。

住吉大社は、摂政11年(211年)、神功皇后が当地に住吉大神を祀って以来の由緒があり、摂津国「一の宮」の社格をもつ全国約2,300社余の住吉神社の総本社。海上交通安全や商業の守護神、和歌道など多くのご神徳があり、とりわけ芸事の神様として古くから新町芸妓の信仰を集めている。今回奉納された神田代舞(財団法人上方文化芸能協会奉仕)は、御稔女(みとしめ)という女性による神楽舞踊で、昭和27年に御田植神

事が助成すべき無形文化財に指定されたのを記念して創作されたもの。豊穡祈願と恵みの雨を呼ぶ龍神祈願の歌舞で、龍神の冠を戴き艶やかに舞う姿に、隆盛を極めた新町花街の往時が偲ばれる。

おたうえしんじ 御田植神事(6月14日)

住吉大社の数多くの神事のなかで、とりわけ華やかで古式を多く遺しているのが毎年6月14日の御田植神事(重要無形民俗文化財)。同社境内の御田で実際に早苗を植え付け、同時に御田の中央に設えた舞台や御田の周囲で舞や踊りなどを奉仕するもので、香取神社(千葉県)や伊雑宮(三重県)と並び日本三大御田植祭のひとつといわれている。今年は梅雨の合間



地元の少女たち総勢150人が踊りながら御田を一周し、神事の最後を飾る。かつて神宮寺(明治維新で廃絶)の社僧が踊ったものといわれている。

神官から早苗を授かった植女が御田へ向かう。萌黄色の装束が美しい。(第一本宮にて)



の好天も幸いして多くの参拝者が御田につめかけ、美しい萌黄色の装束をまとった植女(うめ)にカメラを向けたり、神田代舞や田植踊りなど数々の神事芸能を楽しんだ。

御田植神事の起源は、摂政11年(211年)、神功皇后が住吉大社の鎮座に際して御供田として神田を定め、長門国(現在の山口県)から植女たちを召して御田植奉仕をさせたことにさかのぼる。その後、植女の末裔が旧社領の堺乳守(ちもり)の遊女となり、御田植神事の奉仕を代々続けてきた。しかし明治維新によって乳守遊廓の存続が難しくなり、植女の派遣も途絶。さらに御田を含む境内の土地の多くが民間に払い下げられたため、御田植神事は廃絶の危機に瀕してしまった。そこでこれを憂えた大阪新町廓が、御田を買い上げ住吉大社に寄進。以来、新町の芸妓が植女となった。昭和54年に国の重要無形民俗文化財に指定され、現在、財団法人上方文化芸能協会が新町花街の伝統を引き継いでいる。

御田植神事は植女をはじめ実際に田植えを行う替植女や舞や踊り、祭の手伝いなど総勢約500名が奉仕している。大阪21世紀協会もまた、大阪の誇るべき伝統文化・神事芸能としてこれを支援している。

なごしらいしんじ 夏越祓神事茅の輪ぐり(7月31日)

大阪市内の夏祭りの最後を飾る住吉祭で、7月31日、夏の疫病を払う夏越(なごし)祓神事(無形文化財指定)の「茅の輪ぐり」が行なわれた。

午後5時から行なわれた式は、美しく着飾った夏越女や稚児らに一般市民も加わり、境内3か所に設えた「茅の輪」をくぐって夏越しのお祓いをした。その際、「住吉の夏越の祓いする人は千歳のよはひのぶといふなり」という和歌を口ずさみながらくぐるのが住吉大社のならわしだといわれている。一行の「茅の輪ぐり」が終了した後、第一本宮では熊野舞や住吉踊りも奉納され

植女から早苗を託された替植女(かえうめ)による御田植え。中央舞台では、八乙女たちが田舞を舞う。



た。茅の輪は、住吉祭の終る8月1日の夜まで住吉鳥居に設けられた。

茅の輪をくぐる夏越女や稚児たち



茅草(ちがや)で自身を誂いながら茅の輪をくぐれば、暑い夏を元気に乗り越えることができるといわれている。

※住吉大社「御鎮座1800年大祭」「御田植神事」は、今年度の「南大阪・上町台地フォーラム」には含まれていません。

大阪城復興や関西国際空港、東京スカイツリーなど、土木・建築史に残る数々のプロジェクトに関わり、今年創業120年を迎えた大林組。今年5月に関西経済同友会の代表幹事にも就任された同社の大林剛郎会長に、企業として、また企業家としての社会貢献活動について伺った。

人こそが都市力の源泉 アジアに選ばれる関西をめざして

●御社の社会貢献活動の特色はどのようなものですか。

私たち大林組は、日々の生産活動の拠点である施工現場を国内外各地に持ち、地域の方々と日常的に接しています。社会貢献活動といえば、その現場単位で日常的に行っているというのが特色でしょうか。祭りなど地元の行事に参画する機会も多いんですよ。

企業本体としては、例えば広報誌「季刊大林」の発行があります。各界の専門家に寄稿してもらい、建築に関連する文化活動や将来期待される技術などを広く発信するものです。最新刊は「振動」をテーマに、建物単体ではなく地域全体を免震構造にする「ゼリー免震都市構造」や、振動を電気に変える方法といった夢の技術、建築に関わる文化や芸術などを紹介しています。また、大阪大林ビルの向かいのルポンドシエルビル(大林組旧本店ビル)に「大林組歴史館」を開設しており、今年創業120年を迎えた私たちの事業活動を紹介するとともに、大阪のまちや文化発展の歴史を一般の方々にご覧いただけるようにしています。

●建築以外で社会貢献に注力される意義について伺います。

私たちの本業は「モノづくり」というハードの提供ですが、それだけでは企業としての社会貢献を果たしきれていないと思います。つまり、経済や文化・芸術といったソフト面で都市や建物と関わる人々をサポートすることも、企業としての大事な社会貢献だという考えです。ハードとソフトは一体であるという考えは、父であり第3代社長の大林芳郎の持論でもありました。

父は大林家の私財を投入して「大林都市研究振興財団」を創設し、都市と関係する研究者や学生たちへのサポートをはじめました。現在は大林組も協力し、2年に1度「大林賞」を贈呈して、技術工学的な分野だけではなく、歴史、経済、美術、音楽などの研究や活動を支援しています。経済学者のポール・クルーグマン氏は、ノーベル経済学賞を受賞する以前に大林賞を受賞していたんですよ。

今や日本は、都市や建物をつくる技術で世界トップレベルです。しかし、ソフト面ではまだまだ発展途上だといえるでしょう。私たちは、そうした活動をサポートすることで、魅力的な都市づくりに貢献したいと思っています。

●大林会長が個人で参画されている「バックーズ・ファンデーション」では、どのような活動をされていますか。また、「現代アートレジデンス委員会」についても教えてください。

バックーズとは、さまざまな分野で活躍する人々をバックアップする人たちという意味で、50人ほどのオーナー型経営者が有志で集まって組織しています。1994年に社団法人日本動物福祉協会に助成金を送ることから活動をスタートし、現在は助成金事業だけではなく、会員自ら委員会事業を立ち上げ活動しています。

例えば、2005年に始めた教育事業の「バックーズ寺小屋」は、毎年20名ほどの小・中学生を公募し、よりよい社会人となるための心得や、リーダーとなるための資質を身につけてもらおうというものです。バックーズ会員の体験談を聴いたり、企業訪問をして大人たちが真剣に働いている姿を見たりするほか、合宿では野外活動やスピーチコンテストなどを通して、友情を深めつつ互いに競い合い、励まし合い、助け合う大切さを学んでもらいます。文章作成やプレゼンテーションスキルも学びますので、子供とはいえ大人顔負けのしっかりしたスピーチをしますよ。

「現代アートレジデンス委員会」は、私が2007年に立ち上げた事業です。これは世界の国々から選ばれた現代美術の作家やキュレーターを日本に招聘して滞在してもらい、その間の滞在費を負担したり、発表の場所を提供したりなど、創作活動を支援するものです。今年は5回目(5年目)で、これまでインド、シンガポール、アメリカ、ブラジル、インドネシアなどのアーティストを迎え入れてきました。彼らを支援する理由は、世界を舞台に活躍する彼らが、日本での経験をいろいろな国に伝えてくれるし、作品にも反映してくれる、いわば現代美術の重要なアンバサダー(大使)だからです。



広報誌「季刊大林」



大林組歴史館(内部)

大林剛郎(おおばやし たけお)氏

昭和29年東京都出身。昭和52年慶応義塾大学経済学部卒業後、株式会社大林組入社。昭和53年米スタンフォード大大学院に留学し建設会社経営などを学ぶ。昭和58年取締役。平成15年代表取締役会長。平成23年関西経済同友会代表幹事。

この事業を始めたきっかけは、日本に海外のアーティストを受け入れるプログラムが少ないということもありますが、私自身が現代美術を好きだということも大きいですね。現代美術の作品を買うこと自体がアーティストをサポートすることに直結していますし、なにより作者と実際に会える楽しみがあります。仮にピカソやモネの作品を買えたとしても、こうした楽しみは期待できませんからね。

●関西が都市としての競争力を高めるためには、どうあるべきだとお考えですか。

都市が力をつけるには、さまざまな分野で優れた人材が切磋琢磨していることが大切です。関西には、さまざまなモノづくりの技術や、有力大学をはじめとする教育機関があり、また各都市がユニークなカラーで人を惹きつけるポテンシャルを持ちながら、それらがうまくネットワーク化されていませんでした。そのため関西全体としての発信力が弱く、観光地としての京都や奈良は知られていても、それ以外の都市や地域の良さや魅力が知られておらず、人や企業が集まりにくい状況にあったと思います。

これを打破するためには、関西に行き、住みたくするような経済や文化といった都市のソフト力やシステムを整備する必要があると考えます。そこで関西経済同友会では、とくにアジアの優秀な人材を関西に集めるために、2011年度から「アジアが選ぶ関西」を考える委員会」を立ち上げました。アジアに開かれた地域としてアジアの人の視点から見た関西の魅力・強みの再発見や、統合型リゾート開発を含めた活性化の方策について、調査・研究しています。

今後、関西は独自のネットワークを持ち都市の魅力を高めることで、アジアの人々を集め、世界で活躍する人を輩出できると思っています。そこから世界との新たな絆が生まれることを願ってやみません。



株式会社大林組

大阪市中央区北浜東4-33(大阪本店)
建設事業、不動産事業ほか。1892(明治25)年創業。資本金577億5,200万円。年商1兆1,318億円(2011年3月期・連結ベース)。従業員9,246名。

大川に5万個の「いのり星」を放流 平成OSAKA天の川伝説2011



7月7日、大阪の都心に1日限りの天の川を出現させるイベント「平成OSAKA天の川伝説2011」が開催された。平成OSAKA天の川伝説運営委員会（関西経済同友会、大阪21世紀協会、大阪水上安全協会）の主催で2009年に社会実験として行って以来、今年で3回目。午後7時から9時にかけて約5万個のLED球「いのり星」を八軒家浜・大川から放流し、天満橋界隈に美しい光の天の川を浮かび上がらせた。この日は小雨の降る天候にもかかわらず、約2万2千人が集まり、幻想的な光景に見入っていた。また、八軒家浜「川の駅」では笹飾りコーナーが特設され、多くの来場者が思いの願いを込めた「天の川短冊」を付けていた。とくに今年は、東日本大震災の被災地への鎮魂や応援メッセージも



募り、この短冊は8月6日～8日の仙台七夕まつり会場で披露された。その後、放流された「いのり星」は、放流エリア内ですべて回収された。大阪・天満は、「天に星満る地」という地名の由来をもつ。また、7月7日は「川の日」にも定められている。そうした当地ならではの「平成OSAKA天の川伝説」には、大阪の夏の新たな風物詩として観光集客につなげるとともに、人々の心に愛と希望の光を灯したいという願いが込められている。大川にきらめく「いのり星」は、美しい水がある環境の大切さを語りかけているようでもあった。

5周年を迎え一挙300講座をラインナップ 300 DOORS インターナショナルワークショップフェスティバル2011



講師の西村もゆるさん

大阪21世紀協会提供のダンス講座で、KARAのヒット曲「ミスター」の振付けを体験した皆さん（7月21日・大阪市立芸術創造館）。

1講座500円で楽しめる体験講座の見本市「DOORS（ドアーズ）」が、去る7月16日から8月9日まで、昨年より100講座多い300講座で開催された。創造する楽しさを多くの人に知ってもらおうと、誰もが気軽に参加できる市民参加型プロジェクトとして38講座からスタートして今年で5年目。「DOORS」には、多くの人が自ら進んで文化創造の「扉」を開けてほしいという思いが込められている。

今年は、大阪ステーションシティにオープンした「東急ハンズ梅田店」とクリエイター支援施設「メビック扇町」が新たに会場に加わり、大阪市立芸術創造館（大阪市旭区）や大阪市中央公会堂（大阪市北区）などと合わせ6か所で開催された。今年は、アート、音楽、ダンス、演劇、伝統芸能、語学、料理などのほか、大阪のまちを歩く「野外講座」など新ジャンルの講座も登場。「仕事に関連した見識を深めたい」と環境や鉄道関係の講座を受ける男性や、「興味があるものを片っ端から体験してみたい」と、ダンスや囲碁など19講座を受講する女性など、それぞれが“暑い夏”を楽しんでいた。

主催はIWF実行委員会（大阪市、LLPアートサポート、大阪21世紀協会）。当協会は、このイベントを通してコーディネーターとして活躍できる人材の発掘・育成をめざしている。



政光順二さんの指導による「ミニミニ碁盤で今日から遊ぼう（7月21日・大阪市立芸術創造館）」

西の丸庭園から大阪の芸術文化を発信 大阪城サマーフェスティバル2011



毎年恒例の「大阪城サマーフェスティバル」が、7月2日から9月4日にかけて開催された。大阪城周辺の各会場では、音楽や伝統芸能、大川クルーズなどが行なわれ多くの来場者でにぎわった。主催は大阪城サマーフェスティバル実行委員会（大阪府、大阪市、大阪商工会議所、NHK放送局、各企業、大阪21世紀協会〔事務局〕など24団体）。今年も8月27日～9月4日を「大阪城西の丸ステージウィーク」と銘打ち、ライトアップされた大阪城をバックに特設ステージで演劇や朗読劇などを開催。西の丸庭園の魅力をアピールするとともに、大阪の芸術文化の魅力を内外にPRした。大阪21世紀協会では、平成23年度事業として、同庭園の特設ステージの共同利用をサマーフェスティバルのコア事業として育てよう取り組んでいる。

「西の丸庭園ステージウィーク」でのイベント

幻想的な光のイベント 大阪城 城灯りの景

今年で11回目となる「城灯りの景」。8月28日（27日は雨天により中止）、約2万個のろうそく行灯が、大阪城本丸広場や西の丸庭園など大阪城一帯で幻想的な空間を浮かび上がらせた。行灯は1個100円で参加でき、思いの願いやメッセージが込められた。今年度は参加費の一部が東日本大震災義援金として日本赤十字社を通して寄付された。また、西の丸庭園特設ステージでは、大阪芸術大学の学生による管楽器演奏や創作能などが披露された。



大阪城天守閣復興80周年記念 浪華の夢～城を築くぞ！オレたちの～

天守閣炎上にあった大坂夏の陣（1615年）と大阪市民による天守閣復興（1931年）の人間ドラマが、ライトアップされた大阪城天守閣を背景に、芝居、ダンス、歌をまじえて繰り広げられた。歴史案内人はラジオパーソナリティーの浜村淳さん。8月30日に実施された。



迫真の語りと和楽器の饗宴 朗読劇 一期一会 マクベス

俳優大沢たかおの大胆で自由奔放な朗読と、津軽三味線の吉田良一郎・健一兄弟によるコラボレーション。さらに尺八、琴、和太鼓による純邦楽ユニット「WASABI」と津軽三味線集団が加わり、大阪城をバックに迫力ある饗宴となった。「マクベス」は、権力に溺れ滅んでゆく男を描いたシェークスピアの白眉。9月4日に実施された。

J.S.バッハの100年前に生まれ、「ドイツ音楽の父」といわれる作曲家ハインリッヒ・シュッツ(1585-1672)。その名を冠した大阪ハインリッヒ・シュッツ室内合唱団をはじめ、大阪コレギウム・ムジクム(OCM)所属の3団体による第45回定期演奏会が、今年度の大阪文化祭賞・グランプリを受賞した。結成以来バロック音楽の源流を求め続けた大阪の音楽集団が、現代音楽の新たな可能性をも開花させたのであった。

独自の構成で聴衆を圧倒

グランプリ受賞公演は、平成23年6月26日、いずみホールで行われた。当間修一氏率いる大阪ハインリッヒ・シュッツ室内合唱団と大阪コレギウム・ムジクム合唱団、シンフォニア・コレギウムOSAKA(室内管弦楽団)の総勢100名近くが出演した『第21回現代音楽シリーズ』である。

冒頭、シュッツが1625年に発表した教会音楽『カンツィオーネス・サクレ』から4曲をア・カペラで演奏し、さらにヘンデル22歳の作品『Dixit Dominus(主は言われた)』を弦楽合奏と合唱が共演。バロック音楽揺籃期のイタリアで修行した成果をドイツで広めようとしたシュッツと、才気溢れるヘンデルの若く燃える情熱や使命感を彷彿させた。つづく武満徹作曲の室内オーケストラ作品『雨ぞふる』では、現代音楽を象徴する武満トーンでホールの空気を一変させ、最後の千原英喜作曲「混声合唱のための『ラプソディー・イン・チカマツ』』では、近松門左衛門が描いた日本人の情念を独自の解釈でシアターピース(*)に仕上げ、舞台全体を使って歌いながら踊り、語り、観客の心を江戸時代の空気で絡めとった。

こうした構成は、当間修一氏率いるOCMならではのもの。『バロックは現代(いま)の音楽へ!』という公演タイトル通り、音楽史におけるルネサンス期(声の時代)からバロック期(楽器の時代)にいたる様式の変遷、そして現代におけるシアターピースの演出手法を得て再び「声」へと回帰するさまを、その超絶的な技巧をもって堪能させたのであった。

バッハの源流をたどる

当間氏は、大阪音楽大学在学中よりバッハの音楽に傾倒し、卒業後も教会オルガニストおよび通奏低音奏者として活躍。1975年に大阪コレギウム・ムジクム(ラテン語で「音楽集団」の意)を創設し、バッハにいたるドイツ音楽の源流を追究するなかでシュッツに行き着いた。76年に「アンサンブル・シュッツ(現シンフォニア・コレギウムOSAKA)」、77年に「大阪ハインリッヒ・シュッツ室内合唱団」と「大阪コレギウム



大阪コレギウム・ムジクム(平成23年6月26日・いずみホールにて/写真提供:大阪コレギウム・ムジクム) 大阪H.シュッツ室内合唱団員は毎年オーディションによって厳しく精査される。文化庁芸術祭賞音楽部門優秀賞(1998年)などを受賞。

平成23年度 大阪文化祭賞・グランプリ受賞
当間修一氏 主宰「大阪コレギウム・ムジクム」
大阪からバロック音楽の原点を発信

ム・ムジクム合唱団」を設立。日本でほとんど紹介されていなかったシュッツ作品を大阪の地から発信すべく、340回にわたるマンスリー・コンサートや年3~4回の定期公演(いずみホール)を行い、今年で36年目を迎える。

初めてのドイツ演奏旅行は1989年。ハンブルクやフランクフルトなど5か所を回り、ドイツ人評論家から「ドイツ、ヨーロッパにおける様式を完全にマスターしている。我々ドイツ人は彼らのドイツ語を見習うべきだ」と絶賛された。しかし、その言葉に続いて「あなた達の音楽を聴かせてほしい」といわれたことが、当間氏に大きなショックと転機を与えた。

新たな可能性を開拓

ドイツ人には、『荒城の月』や『ソーラン節』ですら19世紀に完成した西洋音楽の亜流でしかないと思われ取られた。彼らが求めたのは、OCMでしか聴けない音楽だったのである。これを契機に、ドイツ人を唸らせ、日本人をも魅了する日本の音楽を探し求めた当間氏は、日本におけるシアターピースの先駆者・柴田南雄(1916-1996)と運命の出会いを果たす。

当間氏は柴田氏と親交を重ね、1993年、柴田作品をもって再びドイツ公演に挑むや、観客からは前回にも増して総立ちで絶賛された。以来OCMは、シュッツにはじまるバロック路線に加え、シアターピースの新たな可能性を開拓している。「新しい作品が出てきたら、それをもっと良い形で上演できるように成長していきたい。そしてなにより大阪で聴衆を増やしていきたいですね」。当間氏のひたむきな言葉に、イタリアの音楽文化を自国ドイツで昇華させたハインリッヒ・シュッツが重なるように見えた。

(ライター 三上祥弘)

*シアターピース:出演者がステージだけでなく客席にも降り、ホール全体を音源化する演出手法。聴衆をあらゆる方向から圧倒的な声の迫力で包み込む。



当間修一氏(大阪コレギウム・ムジクム主宰、常任指揮者)「大阪は私の音楽活動を育ててくれたところ。グランプリ受賞は、その長年の活動が認められたという格別な思いがある。これを契機に私たちの発信力にも一層弾みをつけたい」

—安藤忠雄文化勲章受章記念—

大阪を元気にする講演会

建築家・安藤忠雄氏の文化勲章受章(平成22年11月)を記念する講演会『大阪を元気にする講演会』が、今年3月31日、大阪国際会議場で開催された。主催は同実行委員会(関西経済連合会、大阪商工会議所、関西経済同友会、大阪国際フォーラム、大阪21世紀協会)。一般人や学生など3,000人の来場者があり、国際会議場メインホールだけでは収まらず別途モニター会場も用意された。

安藤氏は講演で、これまで手がけた国内外のプロジェクトを紹介しつつ、「新しいことに挑戦することで明日の自分を面白くする」「前向きに生きていけば問題が起きても解決しようという意識が働く」「依頼されたことだけを考えるのではなく、自分の仕事の境界を越えて考え、チーム力で切り拓いていく」など、自身の経験にもとづく思いを語り、「100歳まで好奇心をもって生きよう」と呼びかけた。また、東日本大震災で親を亡くした多くの子どもたちを思い、この震災を日本人全員で受け止めて乗り越える気持ちの大切さを訴えた。



安藤忠雄氏



来場者で埋め尽された大阪国際会議場メインホール

演劇の伝統と共同体の関係を議論

国際演劇学会大阪大会

世界50か国から約330人の研究者や大学院生が参加した『国際演劇学会大阪大会』が、今年8月7日から12日までの6日間、大阪大学豊中キャンパスで開催された(事務局 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室)。

国際演劇学会は演劇やパフォーマンス研究者を中心とする国際学会で、1957年に設立。現在、世界50か国以上にメンバーがいる。最近5年間には、ミュンヘン大学(ドイツ)、リスボン大学(ポルトガル)、中央大学(韓国)、ステレンボッシュ大学(南アフリカ)、ヘルシンキ大学(フィンランド)で大会を開いてきた。今年は“伝統・革新・コミュニティ”をテーマに、演劇における伝統性やそれを育む共同体、社会的装置としての演劇の役割などが議論された。また、能勢人形浄瑠璃や宝塚歌劇団月組公演などの観劇会も開催され盛況だった。



大阪大学豊中キャンパスにて

大阪文化祭賞受賞者決定

「大阪コレギウム・ムジクム」がグランプリを受賞

芸術文化活動の奨励と普及を図り、大阪の文化を振興する目的で開催されている毎年恒例の大阪文化祭(主催:大阪府、大阪市、大阪21世紀協会)。今年度は、5月から6月の2か月間にわたり大阪府内で行われた伝統芸能や現代演劇、大衆芸能、洋舞、洋楽など55公演を対象に、厳正な審査を行った結果、下記各賞の受賞者を決定した。

平成23年度大阪文化祭賞各賞受賞者

大阪文化祭賞・グランプリ

大阪コレギウム・ムジクム(合唱・管弦楽) ※P15に記事

大阪文化祭賞

善竹隆司・善竹隆平(狂言)、二代目京山幸枝若(浪曲)

大阪文化祭賞奨励賞

吉田幸助(文楽人形遣い)、打打打団 天鼓(和太鼓)、井上綾乃(ピアノ)、浦田恵子(声楽)



大阪文化祭賞贈呈式(8月26日・大阪市公館)

後援協賛イベント

船場まつり2011

講演やオペラ、子ども神輿、アート展、船場大感謝市、ロボットファッションコンテストなど、船場の多彩な魅力を創出・発信。◆10月3日(月)～9日(日)(催しごとに開催日時・場所が異なります)／大阪市中央区船場地域一帯／入場無料／問合せ:事務局 ☎06-6281-4518、FAX06-6281-4546

水都おおさか森林の市2011

木と触れ合う体験を通して、大人から子どもまで森林の大切さを楽しみながら学ぶ。◆10月8日(土)～9日(日)10:00～16:00／近畿中国森林管理局、OAP、毛馬桜之宮公園周辺／入場無料／問合せ:近畿中国森林管理局 ☎050-3160-6753、FAX06-6881-3564

第12回天満音楽祭

「音づくり・仲間づくり・街づくり」をテーマにした市民参加型の音楽イベント。天満を中心に大阪駅「時空(とき)の広場」に加え、市内各所でライブを実施。◆10月9日(日)10:00～18:30(会場毎に異なる)／OAP1・2・24階、宝珠院、明福寺、専念寺、天三おかげ館、北区民ホールなど27会場／入場無料／問合せ:天満音楽祭実行委員会 ☎06-6351-3450、FAX06-6358-1040

道頓堀はなマダン祭

道頓堀開削400年(2015年)プレ事業。日本のブロードウェイ、道頓堀での日韓のライブエンターテインメントな祭り。(演)演劇祭、(市)グルメ市、(見)パフォーマンスを満喫。◆10月13日(木)～18日(火)連日開催／法善寺、道頓堀商店街、道頓堀ZAZA、とんぼりリバーウォークほか／一部有料／問合せ:道頓堀はなマダン実行委員会 ☎06-6212-3005、FAX06-4963-2244

天満・天神バレエ&ダンスフェスティバル2011

地域のダンスの向上をめざし、世界に羽ばたくアーティストダンサーを発掘。◆10月16日(日)15:00～20:00(昼の部は発表会、夜の部はプロの公演)／大阪市中央公会堂／前売3,500円、当日4,000円／問合せ:天満・天



神バレエ&ダンスフェスティバル2011実行委員会 ☎06-6351-5224、FAX06-6351-5228

升の市

日本の「市」の起源ともいわれ、松尾芭蕉も見学に来た。江戸時代の市の賑わいを再現。◆10月17日(月)9:30～15:30／住吉公園・松尾芭蕉句碑の周辺／入場無料／問合せ:「升の市」実行委員会 ☎06-6782-6274、FAX06-6782-6277

鶴見緑地内「水の館ホール」／入場無料／問合せ:(社)フラワーサイエティ(咲くやこの花館事務所内) ☎・FAX06-6915-0171



第30回日現記念展

常に新しい感覚と創造性を持ち、国際的にも視野を広げる絵画を追求。◆10月18日(火)～23日(日)9:30～17:00(入館は16:30まで)／大阪市立美術館展地下展覧会室／入場料:一般(大人)600円、学生500円／問合せ:日本現代美術協会事務局 石井東二 ☎・FAX072-277-1482

体操フェスティバル 2011 OSAKA 国際大会

“手をつなごう 心をつなごう フェスティバル”をテーマに、国内外から体操が大好きな仲間が集い、日々の成果を披露。フィンランドの体操グループも来日予定。◆シティパフォーマンス10月21日(金)12:15～13:00(大阪市庁舎前広場)、フェスティバル・デイ10月23日(日)10:00～15:00(大阪市中央体育館)／無料／問合せ:NPO法人MGLA事務局 ☎06-6374-5274、FAX06-6374-0373



フラワーフェスティバルin近畿2011

全国産地の商品展示会、フラワーデザインコンテスト、フラワーマーケット、ワンコイン講習会、園芸相談など。◆10月28日(金)～30日(日)・一般公開10:00～17:00(28日は12:00から、30日は16:30まで)／花博記念公園

志芸の会公演「春秋釣狐の会」

大蔵流狂言2番「二人袴」「釣狐」を上演。◆11月20日(日)14:00～16:00／大阪能楽会館／一般前売3,000円、一般当日3,500円、学生前売2,000円、学生当日2,500円／問合せ:志芸の会 ☎078-841-1645



第39回優游会書展(公募展)

全国からの公募による書道展。高校生以上一般による漢字・調和体(漢字かな混じり文)を出品。◆11月22日(火)～27日(日)9:30～17:00(入館は16:30まで)／大阪市立美術館展覧会室1／観覧無料(但し出品締切は9月30日・有料)／問合せ:☎・FAX0725-56-4701

第56回関西新世紀展

関西全域から油彩、水彩、アクリル、版画などの作品を公募・審査のうえ約150点を展示。◆12月6日(火)～11日(日)9:30～17:00／大阪市立美術館／観覧料:一般600円、学生300円／問合せ:新世紀美術協会大阪支部 三浦敏和 ☎・FAX 06-6792-2569

※イベント内容の詳細については、各問合せ先にお問合せください。
※ここに紹介する以外にも、大阪21世紀協会は多数のイベントなどを後援しています。

大阪21世紀協会賛助会員へ入会のお祝い

大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会費(何口でも結構です)	特典
■法人会員一口につき年会費10万円	1.協会が発行する刊行物の配布
■個人会員一口につき年会費1万円	2.協会が主催する各種セミナーなどへの案内
	3.賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

お問合せ (財)大阪21世紀協会 総務チーム TEL.06-6942-2001 FAX.06-6942-5945



楽しむ・学ぶ・語り合う

イベントインフォメーション



「茶の文化」総合イベント

はなやか関西～文化首都年～2011

日程 11月18日(金)→20日(日)

場所 大阪城西の丸庭園
大阪歴史博物館ほか



大阪迎賓館(西の丸庭園)



豊松庵(西の丸庭園)

関西を「文化首都圏」として発展させるため、官民一体となって広域的に取り組んでいるプロジェクト「はなやか関西～文化首都年～」。今年はその初年度にあたり、「茶の文化」をテーマに、非公開茶室めぐりやシンポジウムなどさまざまな企画が進められています。11月18日から20日の3日間は、そのシンボルイベントとして大阪城西の丸庭園を中心に、茶を愉しみ、学び、語る多彩な催しが行われます。

11月18日(金) 13:30～16:30

「茶の文化」フォーラム

(大阪歴史博物館4階講堂)
基調講演／谷 晃氏(茶の湯文化学会会長)
パネルディスカッション／橋爪紳也氏(大阪府立大学特別教授)、佐藤友美子氏(公益財団法人サントリー文化財団上席研究フェロー)、千田 稔氏(奈良県立図書情報館館長)、角山 榮氏(和歌山大学名誉教授)、寺本益英氏(関西学院大学教授)
※入場(無料)は事前申込みが必要です(先着順締切)。
詳細は下記まで、お問合せください。

主催: はなやか関西～文化首都年～「茶の文化」実行委員会(委員長:大阪21世紀協会理事長 堀井良殷)
問合せ: 近畿地方整備局 近畿圏広域地方計画推進室 ☎06-6942-1056 FAX06-6942-3912

11月19日(土)～20日(日)

関西大茶会

(大阪城[大阪迎賓館、豊松庵、豊国神社など])
茶道流派および煎茶道流派による茶会、西大寺大茶盛式、野点、茶室の設営、学生による企画運営ほか

はなやか関西・茶マルシェ

(大阪城西の丸庭園)
実演・展示・試飲・茶葉・菓子・茶道具販売など

大阪21世紀協会提供講座

「都市文化論～梅田地区・新たな知的都市の創造～」

大阪21世紀協会は、大学などの研究機関と連携し、知的成果を社会に活用する学社連携事業に取り組んでいます。平成21年度からNPO法人関西社会人大学院連合と連携し、「インテリジェントアレー専門セミナー」を企画・運営しています。本年度は下記の3講座を開講。大阪駅北地区再開発エリア「うめきた」を中心にテーマとして取り上げ、新たな知的都市の創造について展望します。是非ご参加ください。

2012年

1月19日(木) 19:00～21:00

ナレッジキャピタル①

感性と技術の融合を

めざして

間瀬 豊氏

(株)ナレッジ・キャピタル・マネジメント
代表取締役社長

2月23日(木) 19:00～21:00

ナレッジキャピタル②

世界の若者・学生に選ばれる

関西。「留学生のとまり木」

構想

坂本和一氏

立命館大学名誉教授・経済学博士

3月15日(木) 19:00～21:00

提言「UMEDA GREEN」

～関西をグリーンイノベーションのハブに～

宮原秀夫氏

(株)ナレッジ・キャピタル・マネジメント
エグゼクティブアドバイザー
(独)情報通信研究機構構成員

※各回とも、コーディネーターを堀井良殷(大阪21世紀協会理事長)が務めます

場所:キャンパスポート大阪(大阪駅前第2ビル4階)

受講料: 全回受講5,000円(各回毎受講の場合は1回2,000円)

申込方法: HPからお申込ください。

問合せ: 関西社会人大学院連合事務局 ☎06-6210-3620 (E-mail) cpoosaka@kansai-auae.jp

楽しむ・学ぶ・語り合う

イベントインフォメーション

新進アーティスト57組の展覧会&マーケット アートストリーム2011 イン 大丸心齋橋店

日程 10月6日(木)→10日(月・祝)

場所 大丸心齋橋店
[北館] 14Fイベントホール、1F特設会場
[本館] 6F南エスカレーター横特設会場

若手アーティストの登竜門として今年で11回目を迎えるアートストリーム。今回は、これまで会場だったサントリーミュージアム[天保山]の閉館にともない、大丸心齋橋店で新たなスタートを切ります。過去のアワード受賞者および公募選考による若手アーティストの作品展・即売会のほか、光や映像、インタラクティブが作り出す体験型アートの世界を表現した『松尾高弘インタラクティブアート作品展』や、表情までリアルな人物やユーモラスな動物などの緻密な3D紙細工『鶴田晴彦カリカチュア寄紙細工展』も併催。アートストリーム最終日には、公募出展者の中から審査委員によるアワード受賞者が決定・発表されます。

審査委員: 大阪芸術大学教授 絹谷幸二氏
兵庫県立美術館長 蓑 豊 氏
空間構想デザイナー 中崎宣弘氏
スーパーステーション取締役副社長 田崎友紀子氏

主 催:アートストリーム実行委員会
(大阪21世紀協会、大阪芸術大学、大阪府、大阪市)
問合せ:実行委員会事務局(大阪21世紀協会内)
☎06-6942-2004 FAX06-6942-5945



水辺で楽しむ吹奏楽の迫力 OSAKA水上音楽パレード2011

日程 10月23日(日)

場所 大川・八軒家浜界限(13:30~15:30)
道頓堀川(16:15~16:45)

大阪市内の河川を航行する船舶のパレードを、高校吹奏楽部の演奏で盛り上げる、水都大阪ならではの秋の風物詩。今回は、競艇ボートのデモ航走や大阪国際滝井高校、大阪市立扇町総合高校、四條畷学園高校の各吹奏楽部に陸上自衛隊第3師団音楽隊が加わり、迫力ある演奏で盛り上げます。道頓堀川(戎橋-太左衛門橋間)では、



大阪市立扇町総合高校(船上)と四條畷学園高校(八軒家浜棧橋上)吹奏楽部による演奏風景(2010年)

地元のジャズバンドとも競演。今年は「大阪の安全・安心」をテーマとして、災害時の船舶の対応なども紹介します。

OSAKA水上音楽パレードは、高校吹奏楽部の発表の場として、また、市民が水辺で吹奏楽に触れる機会として定着していくことを目指しています。

主 催:大阪21世紀協会、大阪水上安全協会
問合せ:大阪21世紀協会 ☎06-6942-2004
FAX06-6942-5945